



太宰治 『新ハムレット』 とその周辺

藤原, 耕作

(Citation)

國文論叢, 21:58-70

(Issue Date)

1994-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011791>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011791>



太宰治『新ハムレット』とその周辺

藤原耕作

一

『新ハムレット』は、昭和十六年七月二日に文芸春秋社から発行された、太宰治最初の書き下ろし長編小説である。この作品を書き下ろすにあたって、太宰は、激しい意気込みを周囲の人々に語り、厳しい決意の程を周辺の人々に印象として与えている。例えば、親しい友人であり、厳しい先輩でもあった山岸外史に、太宰は次のような書簡を送っている。(注1)

けふから、懸案の長編小説にとりかかります。三百枚くらゐの予定です。当分、他の仕事は断つて、没頭しようと思ひます。(昭和十六年二月一日)

私は、仕事の緊張感で、かへつて、この二、三日は、いけませんでした。少し興奮しすぎたやうです。(昭和十六年二月十六日)

仕事をしに、表記(静岡県清水市三保三保園、引用者注)へ来てしまひました。しづかな宿で、仕事が出来さうな気がします。

しばらく、ここで勇猛精進してみるつもりです。(昭和十六年二月十九日)

執筆後に井伏鱒二に送った書簡では次のように書いている。

事前に於いては、舶来品よりも、すぐれた純国産飛行機を創らうといふ意気込みがありました。外国の二流三流の作家よりは、日本の作家のほうが、昨今ずっと進んでゐるのだといふ事を直接に証明したい気持でした。(昭和十六年八月二日)

また、八雲書店版全集第六号付録にはつぎのようにある。(注2)

「新ハムレット」は先生最初の書下し長編でした。「仕事中」

と、名刺の裏に書いて玄関にはりつけられて、これに没頭されていきました。こんなことも先生は始めてのことでした。
(昭和二十四年二月)

他にも当時の太宰の意気込みを語る資料には事欠かない。執筆時における太宰の意欲を私たちは推し量ることができる。そして出来上がった作品を、奥野健男は次のように高く評価している。

そしてこの期（太宰のいわゆる中期を指す、引用者注）の最大の傑作「新ハムレット」は典型的な近代心理小説です。現実の社会において心理学的な場を発見することの出来なかつた彼は、このシェイクスピアの戯曲を借りることにより、見事にそれを近代的な心理小説につくり変えたのです。ここでは異常性格者と常識人との争い、自己の真実に生きる芸術家と自己をごまかして生きる俗人との争い、（しかしその俗人クロージヤスは少し太宰的でありすぎます。彼はまだこの時、社会人の新型の悪を、決定的な他者を描くことは出来なかつたのです）現代秩序への反逆、愛の表現論、更には戦争への懷疑まで、それらが縦横に作者によって、操作され余す所がありません。^(注三)

しかし、太宰自身は、『新ハムレット』を、決して高くは評価していなかったようだ。初版の「はしがき」には次のようにある。

二月、三月、四月、五月。四箇月間かかつて、やつと書き上

げたわけである。読み返してみると、淋しい気もする。けれども、これ以上の作品も、いまのところ、書けさうもない。作者の力量が、これだけしか無いのだ。じたばた自己弁解を試みたところで、はじまらぬ。

また、先ほど引用した昭和十六年八月二日の井伏鱒二宛書簡の続きには次のようにある。

けれども、事後に於いては、

自分の現在の力の限度を知りました。之は、ありがたい事だと思つて居ります。淋しい気持もありますが、また、一面に於いて、人から突かれても、「しまつた！」といふ狼狽も感じません。いさぎよく観念してゐるところがあります。

私は、奥野健男のように、『新ハムレット』を、中期の「最大の傑作」と評することには賛成できない。『新ハムレット』は、この時期の太宰を考える上で、非常に興味深い作品であるが、作品としては決して完成度の高いものではないと考えている。逆に、太宰自身の言葉にもあるように、この時期の太宰の「限界」を明瞭に物語っている作品であるように思う。当初のすさまじい意気込みにも関わらず、どうして『新ハムレット』は、太宰の可能性よりも、限界を物語る作品となつたのか。本稿ではそういったことについて考えていくことにする。

まず、太宰はなぜ激しい意気込みをもって『新ハムレット』執筆にとりかかったのか。論をそこから始めることにしよう。ここで一つ注意しておかなければならないことは、『新ハムレット』は、その前年に執筆され『新ハムレット』が完成された五月に単行本として発行された『東京八景』と、かなりその執筆の状況において近似しているということである。「東京八景」も「異常ないきごみ」(津島美知子)で、十年間の太宰の東京の生活を、「その時々々の風景に託して」書いてみた、という作品である。最終的には、太宰の「生きなければならぬ」という決意と「一箇の原稿生活者」として立つという意志確認がなされている。自らの原点を確認し、作家としての決意と自負がそこでは述べられていると基本的には考えていい。昭和十四年から十五年にかけては、精力的に創作活動を展開し、原稿の注文も増加し、創作集も出版し、職業作家として生きていく自信を太宰は得ようとしていた。余裕と安定の時期を迎えようとしていたのである。過去に一応の整理をつけ、作家としての地歩を固めていこうとする太宰の姿勢を感じとることができる。太宰は『東京八景』を「青春への訣別の辞」である、としている。

『新ハムレット』は、そのような時期における最初の書き下ろし長編小説なのである。太宰は、昭和十三年に「はじめて本気、文筆を志願」(『東京八景』)し、「思ひをあらたにする覚悟」(『富嶽百景』)でとりかかった書き下ろし長編小説「火の鳥」で、中絶の憂き目をみている。長編小説を書き上げることができるかど

うかは彼自身にとっても大きな問題だったろう。また、太宰にあっては、『新ハムレット』は、「私小説」でもあった。先に引用した昭和十六年八月二日の井伏鱒二宛書簡に次のようにある。

それから、私の過去の生活感情を、すっかり整理して書き残して置きたい気持がありました。その意味では、私小説かも知れません。それから、形式は戯曲に似てゐますけれど、芝居ではなく、新しい型の小説のつもりで書きました。

「過去の生活感情を、すっかり整理して書き残して置きたい気持」で書いたと太宰は言う。それはおそらく「東京八景」も同じだろう。

「東京八景」と『新ハムレット』の親近性を暗示する事実も一つある。『新ハムレット』におけるハムレットの年齢設定の問題である。千葉宣一「『新ハムレット』試論」(註七)に既に指摘があるが、『新ハムレット』においてはハムレットが二十三才であるという年齢設定が非常に強調されている。例示は千葉論に譲るが少なくとも四方所にわたってハムレットが二十三才であるということが述べられているのである。千葉は「二十三歳と云う設定には、いかなる作者の意図が秘められ、内的必然性を持っているのであろうか」と問題提起し、「太宰にとって、二十三歳とは、満二十二歳の昭和五年のことである」(実際に昭和五年は満二十一歳)とする。昭和五年は太宰にとって多難な年であった。一月には弘前警察署により上田重彦等弘前高校内の左翼分子が検挙され放校処分となる。新聞雑誌部委員中、太宰はただ一人難を免れ

ている。四月には東京大学仏文科に入學、上京。弘前高校の先輩に勧誘されて共産党のシンパ活動に加わる一方、井伏鱒二に師事。六月、三兄圭治病没。十月、弘前高校時代の愛人小山初代が出走、上京。太宰の長兄文治は十一月に上京し、分家除籍を条件に二人の結婚を認め、一旦初代を連れ帰る。その間に、太宰は銀座のカフェ・ホリウッドの女給田辺あつみ（戸籍名田部シメ子）と鎌倉七里ヶ浜で薬物心中を図り、女は絶命。太宰は自殺幫助罪に問われ、起訴猶予となる。十二月、小山初代と仮祝言をあげる。こういった太宰の伝記的事実を挙げた後、千葉は次のように書く。

昭和五年は、太宰の精神史に生涯癒えることのない原罪的な傷痕を刻んだ。長兄や共産主義者に対するコンパウンドコンプレックス。田辺あつみへの贖罪意識。初代に抱いた愛と憎しみの双価感情など、ぎりぎりの葛藤に苦悩し、自己崩壊の危機に耐えた、あの二十三歳の日々こそが、自らの文学のコア・パーツナリテイを形成したのだと覚醒したとき、そのおぞましい、煉獄体験における等身大の自画像を検証すべく「新ハムレット」の構想が一挙に孵化したのである。

先にも少し触れたように、昭和五年は太宰の二十三才ではないが、余り細かい事にはこだわらず、『新ハムレット』で「整理して、書き残して置きたい」という気持ちの原点となっているのは、昭和五年であり、昭和六年であるとみてよいだろう。「東京八景」では、昭和五年の心中事件について、「女は死んで、私は生きた。死んだひとの事に就ては、以前に何度も書いた。私の生涯の、黒

点である。」というように書いている。又、太宰の二十三才である昭和六年については次のように述べている。

長兄はH（小山初代を指す、引用者注）を、芸妓の職から解放し、その翌るとしの二月に、私の手許に送つて寄こした。言約を潔癖に守る兄である。Hはのんきな顔をしてやつて来た。五反田の、島津公分譲地の傍に三十円の家を借りて住んだ。Hは甲斐甲斐しく立ち働いた。私は、二十三歳、Hは、二十歳である。

五反田は、阿呆の時代である。私は完全に、無意志であった。再出発の希望は、みちんも無かつた。たまに訪ねて来る友人達の、御機嫌ばかりをとつて暮してゐた。自分の醜態の前科を、恥ぢるところか、幽かに誇つてさへゐた。実に、破廉恥な、低脳の時期であつた。学校へもやはり、ほとんど出なかつた。すべての努力を嫌ひ、のほほん顔でHを眺めて暮してゐた。馬鹿である。何も、しなかつた。ずるずるまた、れいの仕事の手伝ひ（共産党のシンパ活動を指す、引用者注）などを、はじめてゐた。けれども、こんどは、なんの情熱も無かつた。遊民の虚無。それが、東京の一隅にはじめて家を持つた時の、私の姿だ。

こういった二十三才当時の太宰の自画像が、おそらくハムレットには重ねられている。「東京八景」の文章を読むだけでも明らかに感じることができよう。「無意志」であり、「何も、しなかつた」という彼の姿は、自ら行動を起こさずとしないハムレッ

トに重なる。「遊民の虚無^{ニヒル}」という言葉は、レアティーズのハムレット批判の中の言葉に、あの人はニヒリストだ、道楽者だ、という言葉があったのを思い出させる。『新ハムレット』の中で、太宰は、二十三才当時の彼自身を対象化し、捉え直そうとしているのである。「東京八景」の中ではそれはそのまま私小説の体裁をとってなされた作業だった。「東京八景」の中で太宰は次のように書く。

私は、ことし三十二歳である。日本の倫理に於ても、この年齢は、既に中年の域にはひりかけたことを意味してゐる。また私が、自分の肉体、情熱を尋ねてみても、悲しい哉それを否定できない。覚えて置くがよい。おまへは、もう青春を失つたのだ。もつともらしい顔の三十男である。東京八景。私はそれを、青春への訣別の辞として、誰にも媚びずに書きたかつた。

ここにもはつきり書かれているように、「東京八景」は太宰の「青春への訣別の辞」であり、同時に職業作家として立つことを宣言した作品であった。『新ハムレット』も基本的には同じ作業を繰り返している。既に先行研究に指摘があるように、太宰が「はしがき」で「人物の名前と、だいたい環境だけを、沙翁の『ハムレット』から拝借して、一つの不幸な家庭を書いた」という、「一つの不幸な家庭」は、ハムレットの「一家であると同時に、太宰の実家である津島家を意味しているだろう。ハムレットには勿論太宰が、クローディアスには長兄文治が重ねられている。太

宰が『新ハムレット』を指して、井伏鱒二宛の書簡の中で、「私小説かも知れませんが」と言っていたのには、そういう意味がある。そして『新ハムレット』も、「東京八景」同様に、「青春への訣別の辞」であり、職業作家としての決意を示す作品となるはずであった。しかし、出来上がった『新ハムレット』は、決してそういう作品にはなっていない。なんともわかりにくい、座りの悪い作品になっているのである。ハムレットの最後の言葉、「信じられない。僕の疑惑は、僕が死ぬまで持ち続ける」が、作品全体を象徴しているといつてよい。

三

二で言ったことを、もっとわかりやすく、図式的に言い替えれば、太宰は「子供」から「大人」へ、という過程を『新ハムレット』に描こうとし、それに必ずしも成功していない、ということである。「子供」と「大人」という言い方をすればすぐに思いつくように、「新ハムレット」は「子供」であるハムレットと「大人」であるクローディアスの対立を中心に成立している世界である。荒正人は「太宰治著『新ハムレット』」の中で、「この作品の基調をなすものは、二つの異質な世界、作中の言葉を借りて言へば、『若い者』と『大人』の世界の交渉にあると見てよいだろう」と言っている。荒は、これら二つの世界の交渉の特質は、激しい相克と闘争にあるというよりは、成功しなかった和解にあるという。確かに『新ハムレット』の中で、ハムレットとクローディアスとは激しく対立しているとは言えないだろう。クローディアスはハムレットにできるだけのわかりのいいところを見せ

ようとすると、ハムレットも決してクロード・ディアスのことを悪人であるとは思っていない。ハムレットはホレーシオに王のことをどう思っているのかと尋ねられて、結論としては次のように言う。

「だけど叔父さんは、悪いひとぢやない。それだけは、たしかだ。小さい策士かも知れないけれど、決して大きい悪党ぢやない。」

原典ではハムレットはクロード・ディアスに復讐のチャンスを探い、クロード・ディアスはハムレットを殺そうとするのであるが、そういった殺す殺されるという根本的な対立は『新ハムレット』にはないのである。これを荒正人は批判している。

なぜ二つの世界が天地を轟かして激しく噛み合ひ格闘しないのであるか。なぜ作者はハムレットとともに叔父クロード・ディアスによつて代表されるやうな俗物世界の転覆を企てようとしていないのであるか。

確かにハムレットとクロード・ディアスの間に対立らしい対立、対決らしい対決がない点は、この作品の印象をあやふやなものとしていえると言つてよいだろう。「子供」の世界から「大人」の世界へと移行しようとした太宰は結果的にはどちらにもつけない中途半端な位置にすることを露呈しているようにも思える。

太宰ハムレットの特徴はとにかく行動を起こさないことにある

と言つてよからう。例えば原典では劇を見た王の反応を通して確かな証拠を得ようとするのはハムレットであるが、『新ハムレット』では劇をしようと言ひ出すのはポロニアスの役目となる。又、ポロニアスを殺すのは原典ではハムレットであるが、『新ハムレット』では王の役目となる。先王の亡霊に復讐を誓う場面は省略されるし、イギリスに船出して殺されかける場面もない。レアティーズが途中で死んでしまうので彼との決闘もないし、最後に王を殺す場面も勿論ない。「裏切者は、この、とほり！」と言つてハムレットが短剣で切り裂くのは自分の左の頬なのである。これは行動を起こさないと言うよりも、行動を起こせないのではないかと思われる。この作品でのクロード・ディアスは、ハムレットが反発し、対決することによつて成長し、「大人」へとなつていくやうな、「悪」としては描かれていないし、逆にハムレットがそれに同化するることによつて「大人」へとなれるやうな、立派な「大人」としても役不足な人物である。この作品の中では、おそらくハムレットは、「疑惑」を持ち続けることがやつとで、自ら行動を起こすことはできそうにない。問題はハムレットの造形だけにではなく、クロード・ディアスの造形にもありそうである。

四

クロード・ディアスをどう捉えるかは、作品の中でのクロード・ディアスの造形の不明確性や、戦後の再録本での作者の発言もあつて、少々難しい作業になる。まず、同時代評に限つてみれば、クロード・ディアスをも善人として描いている、という解釈がほとんどである。発表された順に見ていくと、まず、井伏鱒二は次のように言

う。

ところで、この作品に登場する人物は、たいがいみんな善良である。しかも至るところに悲劇が生じ、また大きな悲劇的結末が約束されてゐる。相寄るものが善良なるが故に毎度ながら悲劇が生じるといふことは、大いに有り得ることである。それは申すまでもない。^(注上)

又、正宗白鳥は次のように評している。

たしか、志賀直哉氏の作品に、国王クローチアスを取扱つたものがあつて、この国王に好意を寄せた書振りであつたと私は記憶してゐるが、太宰氏の新作にも、この国王に好意が寄せられてゐるやうだ。(中略)沙翁の原作では、いやな奴らしく現されてゐるクローチアスを、日本の作家が眞摯にするのは不思議のやうでもある。^(注上)

太宰の作品のよき理解者であつた山岸外史も、疑問を提起するという形で、次のように述べている。

尚、最後に一言、太宰君にむかつて言ひたいことは、この作品の中に一人もほんとの悪人がゐないといふことは、心理を^(注上)実験する戯曲としては、ことにふしぎなことではないだらうか。

最後に、先に引用した文章の中で、荒正人は次のように言っている。

この作品の主人公をはじめとする諸々の人物がすべて善人であると評されるのは、必ずしも作者にとつては名譽のあることではなからう。

クローチアスに限つたことではないが、『新ハムレット』で描かれる人物には悪人がいないということが、共通した見解となっているのである。

ところで、『新ハムレット』は、戦後になつてから鎌倉文庫刊の現代文学選23『猿面冠者』に再録されるのであるが、その「あとがき」で太宰は次のようなことを言い出すのである。

このたびの選集には、大戦中に再版できなかった作品だけを収録した。さうして、この選集一つお読みになれば、太宰といふのはこの十年間、一体どんな事に苦しみ努めて来た作家か、たいていおわかりになれるやうに工夫して編輯した。

最後の「新ハムレット」は、新しいハムレット型の創造と、さらにもう一つ、クローチアスに依つて近代悪といふものの描写をもくろんだ。ここに出て来るクローチアスは、昔の悪人の典型とは大いに異なり、ひよつとすると気の弱い善人のやうにさへ見えながら、先王を殺し、不潔の恋に成功し、さうして、てれ隠しの戦争などをはじめてゐる。私たちを苦しめて来た悪人は、この型のおとよに多かつた。

この作品の出版当時、これに対する文壇の評論の大半は、クローヂヤスのこの新型の悪を見のがし、正宗白鳥氏などもこのクローヂヤスに作者が同情してゐるとさへ解されてゐたやうである。さらにこのたび、ひろく読者に、再吟味を願ふ所以である。

「大戦中に再版できなかつた作品」というのは「時局」にあわなかつた作品ということだろうか。いずれにしろ、かなり、太宰の自負の感じとれる文章ではある。ここで太宰はクローヂヤスに「近代悪」というものを描いたという。一見「気の弱い善人」に見えるながらも、やはり、「悪人」として描写している、というのである。つまり、太宰自身の解説によれば、同時代の「文壇の評論の大半」は「誤読」をしている、ということになる。しかし、はたしてそうなのだろうか。私には、やはり、当時の評者が、『新ハムレット』のクローヂヤスを、「善人」であると解釈したことには、それなりの理由があると思える。また、太宰が戦後になつてから、クローヂヤスが悪人であることを強調していることにも、昭和十六年における「時局」に対する配慮以外に、彼の意識の変化を感じる。それについては後で考えるが、昭和二十二年の段階の太宰に好意的にこの作品を解するなら、磯貝英夫の次のような評価が妥当ということになろう。

実際には、太宰が、戦後版の「あとがき」で、正宗白鳥が、クローヂヤスに作者が同情していると誤読したことを記しているように、それも、作者得意のうら返しの技法の多用の

げに埋没気味になつていて、それは決して作品のてがらではないのだが、究極的には、やはり、作者は、かつて対立してきたおとなへの疑惑を捨てず、それを、当時の戦時風潮にまでひきまわすんで、暗に時代批判をしくんだと見てよいのである。^(註十三)

磯貝は、「決して作品のてがらではない」という留保付きで、『新ハムレット』に「時代批判」を読み取っているのだから、私と根本的に立場が異なるわけではないのだと思うが、しかし正宗白鳥の読みを「誤読」であるとするのは多少引つかかる。昭和十六年の初版本を読む限り、作者がクローヂヤスを「悪人」として描いていない、と読むことは、決して「誤読」ではないと私は思う。作者はあるいはその時点で既にクローヂヤスに「近代悪」を描いたつもりであつたかもしれない。しかし、問題なのは作者の意図ではなく、クローヂヤスに「近代悪」など相当深読みしなければ読み取れず、逆に「気の弱い善人」としてのクローヂヤス像しか見えてこない、ということなのだ。少なくとも初版の段階では作者の立場は戦後の再録本の「あとがき」でのようには固まつていなかったのではないか。それはたとえば次のような場面の加筆にあらわれているように思う。「八 王の居間」の最後の王の台詞である。

王。「涙。わしのやうな者の眼からでも、こんなに涙が湧いて出る。この涙で、わしの罪障が洗はれてしまふといひのだが、ポロニーヤス、君は一体なにを見たのだ。君の疑ふのも、

無理がないのだ。あつ！ 誰だ！ そこに立つてゐるのは誰だ！ 逃げるな。待て！ おお、ガーツルド。」(初版本)

王。「涙。わしのやうな者の眼からでも、こんなに涙が湧いて出る。この涙で、わしの罪障が洗はれてしまふといいのだが、ポローニヤス、君は一体なにを見たのだ。君の疑ふのも、無理がないのだ。わしは、殺した。あつ！ 誰だ！ そこに立つてゐるのは誰だ！ 逃げるな。待て！ おお、ガーツルド。」(再録本、傍線引用者)

初版本では王は「君の疑ふのも、無理がないのだ」とは言うが、王が本当に先王を殺したから疑うのも無理がない、と言っているのか、それとも殺しはしないが疑わしい行爲をしたからそうなのか、という点のはつきりしない。それに対し、再録本ではそのあとに「わしは、殺した」という台詞を挿入することによって、明らかに王が先王を殺したことを読者に推測できるようにしてある。初版本では結局真相は藪の中だが、再録本でのクローディアスはいくらかわかりやすい「悪人」として描かれているのである。これは「あとがき」での「近代悪」の描写を意図したという宣言と呼応しあうものであろう。「ひよつとすると気の弱い善人のやうにさへ見えながら、先王を殺し、不潔の恋に成功し、さうして、てれ隠しの戦争などをはじめてゐる」人間として、「あとがき」では規定されるクローディアスであるが、少なくとも「先王を殺し」たということがはつきりされているのは、戦後の再録本でであったことには、しっかり注意して置くべきだろう。初版本をテ

キストとするかぎり、クローディアスが「先王を殺し」たというのは一つの解釈に過ぎまい。それに加えて、クローディアスの次のような発言をあわせて読むとしたらどうか。

汚辱の中にもながらも、堪へ忍んで生きてゐる男もゐるのだ。死ぬ人は、わがままで。わしは、死なぬ。生きて、わしの宿命を全うするのだ。神は、必ずや、わしのやうな孤独の男を愛してくれる。

これを「東京八景」のなかでの「私は、生きなければならぬと思つた」という言葉と重ねることも不可能ではあるまい。おそらく、クローディアスには、部分的にはあるにせよ、「子供」から「大人」にならうとしていた当時の太宰の自画像が少なからず重ねられている。作者がクローディアスに同情していると読んだ正宗白鳥の読みは決して見当はずれのものではあるまい。戦後の太宰はおそらくそういうものを切り捨てたところに立っているのである。

五

正宗白鳥が少し触れていたが、志賀直哉にも『ハムレット』を扱った作品がある。大正元年九月に『白樺』に発表された「クローディアスの日記」である。ここでの志賀の立場は、いかにも彼の作品らしく、太宰の『新ハムレット』に比べれば、明確すぎるくらい明確である。志賀は明治四十五年の三月十日の日記に「『ハムレット』读了、ハムレットといふ若者には自分は同情が

出来ない」と書いているが、そういったところを出発点として、彼の作品は、徹頭徹尾クローディアスの側にたつて書かれる。「ハムレット」の劇では幽霊の言葉以外クローディアスが兄王を殺したといふ証拠は客観的に一つも存在していない事（「創作余談」）を逆手にとり、クローディアスはまるで罪を犯していないと設定し、ハムレットを「気障な、講釈好きで、身勝手な、芝居気の強い、そしておしやべりな奴」として否定的に描いている。「新ハムレット」について考えた際に用いた用語を使って言えば、徹頭徹尾、「大人」の立場に立つて書かれた作品であると言える。この作品は、『新ハムレット』と比較してみると非常に興味深いものを感じる。

太宰が志賀の「クローディアスの日記」を意識していたことは殆ど確実である。例えば、小山清に次のような回想がある。

十六年の二月頃、三度目の訪問をしたときには、太宰さんは「新ハムレット」の書下しにとりか、つてみた。私が志賀さんの「クローディアスの日記」のことを口にしたら、太宰さんは自分の書かうとしてあるものもつと新味のあるものだといふ意味のことを云つた。(在生十四)

「新味のあるもの」というのはどういう意味だろうか。形式上の事だろうか。内容面のことだろうか。それともその両方だろうか。そのあたりは判然とはしないが、この回想から太宰が志賀の「クローディアスの日記」を読み、それを念頭に置いていたことは事実であると云つてよからう。

「クローディアスの日記」は、志賀のハムレットへの反発とクローディアスへの共感からなつた、内容的には非常に作者の位置が分かりやすい作品である。作品としては、単純な「ハムレット」の世界の反転であり、深みのあるものとはいえない。しかし、太宰が終生何らかの意味で反発し続けた志賀的な論理の強固さがそこにはある。太宰が「子供」から「大人」へと歩を進めるためには、太宰ハムレットは、正面切つて、志賀クローディアスと対決する必要があつたように思ふ。そうであつてこそ、太宰ハムレットは、「新味のあるもの」となるだろう。しかし、太宰は、少なくとも「新ハムレット」においては、そういった正面突破を回避しているように思える。だから太宰ハムレットは行動を起こせない。作者はハムレットに二十三才の自分を重ねて対象化し、それを他の登場人物を通して痛烈に批判する。これは、太宰の前期の作品群からの明かな離脱だろう。しかし、ハムレットは批判されながらも神性を帯びた存在として描かれている。オフエーリアはハムレットを散々批判しながらも、結局は次のようにいっているのである。

けれども、あたしは、あのお方を好きです。あんなお方は、世界中に居りません。どこやら、とても、すぐれたところがあるやうに、あたしには思はれます。いろいろな可笑しな欠点があるにしても、どこやらに、神の御子のやうな匂ひが致します。(一六 庭園)

しかし、だからと云つて作者は「子供」の論理の上に立つとうとし

ているわけではない。対する「大人」の論理を体现している筈のクローディアスの論理にも理解を示しているように見えるのである。太宰が『新ハムレット』でとっている立場は、志賀が「クローディアスの日記」でとっているそれに比べると、実に中途半端なものに思える。

六

戦後の、それも、「如是我聞」^(注十五)くらいになると、太宰の取る立場は揺るぎのないものとなる。「如是我聞」の論理は、志賀などの「強者」に対してあくまで「弱者」の論理で立ち向かう、というものである。言い替えれば、太宰は結局「大人」の位置には立たずに、「子供」の位置で発言することを選んだ、ということだろう。ある意味では前期の位置への逆戻りである。

太宰の中期の興味深い点は、前期や後期の「子供」の立場で開き直ることをせず、自らを対象化し、「大人」の論理を理解しようとした点にある。しかし、それは『新ハムレット』に端的に見てとれるように、必ずしも成功はしていない。一見高らかに「大人」になることを宣言しているように見える「東京八景」でさえ、次のような記述で終わる。

増上寺山門の一景を得て、私は自分の作品の構想も、いまや十分に弓を、満月の如くきりりと引きしぼつたやうな気がした。それから数日後、東京市の大地図と、ペン、インク、原稿用紙を持つて、いさんと伊豆に旅立つた。伊豆の温泉宿に到着してからは、どんな事になつたか。旅立つてから、もう

十日も経つけれど、まだ、あの温泉宿に居るやうである。何をしてゐる事やら。

彼一流のポオズなのか、照れなのか、或いは韜晦なのか。いずれにしる、彼自身の高らかな宣言自体を、相対化してしまうのである。「東京八景」においてさえ、作者の位置は決して明確なものではない。『新ハムレット』においては、それはさらにあらわなものとなっている。

こういった迷いのようなものは、後期の作品には見られなくなるものである。それが再録本の「あとがき」にあらわれているのだと私は考えている。つまり、クローディアスを「近代悪」として描いた、とはつきり云えるような位置には、昭和十六年の太宰は居なかった、ということである。後期になって、あらためて、「子供」の位置をはつきりととるようになってから、志賀やクローディアスを批判できるところに彼は戻ってきたのだと思う。堤重久は次のように回想している。

二月に入って懸案の長編小説『新ハムレット』にとりかかる。この小説に対しては、太宰は大変な熱の入れようで、当時私には、「ネガティヴの悪人の創造に腐心している」といつていた。^(注十六)

この回想にあるように、あるいは太宰は当初からクローディアスに「悪人」を描こうとしていたのかもしれない。しかし、そうであったにしても、荒正人や、正宗白鳥、山岸外史らがクローディ

アスを「善人」としか読めなかったような、そんな人物しか創造できなかったところに、この時期の太宰の位置の不明確さがあらわれている。

ただし、私は中期の太宰は立場のとり方が不明確だから、初期や後期に劣る、と云いたい訳ではけっしてない。この時期の太宰は、自分の居心地のいいところに閉じ込もってしまわずに、明らかに歩を進めようとしている。その結果、『新ハムレット』は作品としては明瞭な輪郭を欠くものとなってしまったし、あるいは太宰の文学の限界をも露呈してしまったのかもしれないが、だからこそ、非常に興味深い作品になっているように思うのである。

注

※ 『新ハムレット』の引用は基本的に昭和十六年七月二日文藝春秋社発行の『新ハムレット』に拠り、適宜昭和二十二年一月二十日鎌倉文庫発行の『猿面冠者』収録の「新ハムレット」を参看した。ただし旧字は新字にあらためている。

注一 書簡の引用は『太宰治全集』第十一卷（平成三年三月二十日発行、筑摩書房）による。

注二 引用は『太宰治研究』臨時増刊号（昭和三十八年一月十九日発行、審美社）による。

注三 奥野健男『太宰治論』（昭和三十一年二月、近代生活社）、引用は新潮文庫本による。

注四 『東京八景』（昭和十六年五月三日発行、実業之日本社）

注五 「東京八景」（『文学界』昭和十六年一月）、引用は『太宰治全集』第三卷（平成元年十月二十五日発行）による。

注六 「愛と美について」（昭和十四年五月二十日発行、竹村書房）に発表。

注七 『解釈と鑑賞』昭和六十二年六月。

注八 ちなみに「東京八景」では「故郷の家の不幸」が次のように描かれている。

何の転機で、さうなつたらう。私は、生きなければならぬと思つた。故郷の家の不幸が、私にその当然の力を与へたのか。長兄が代議士に当選して、その直後に選挙違反で起訴された。私は、長兄の厳しい人格を畏敬してゐる。周囲に悪い者がゐるのに違ひない。姉が死んだ。甥が死んだ。従弟が死んだ。私はそれらを風聞に依つて知つた。早くから、故郷の人たちとは、すべて音信不通になつてゐたのである。相続く故郷の不幸が、寝そべつてゐる私の上半身を、少しづつ起してくれた。私は、故郷の家の大きさに、はにかんでゐたのだ。金持の子といふハンデキャップに、やけくそを起してゐたのだ。不当に恵まれてゐるといふ、いやな恐怖感が、幼時から、私を卑屈にし、厭世的にしてゐた。金持の子供は金持の子供らしく大地獄に落ちなければならぬといふ信仰を持つてゐた。逃げるのは卑怯だ。立派に、悪業の子として死にたいと努めた。けれども、一夜、気が附いてみると、私は金持の子供どころか、着て出る着物さへ無い賤民であつた。故郷からの仕送りの金も、ことし一年で切れる筈だ。既に戸籍は、分けられて在る。しかも私の生れて育つた故郷の家も、いまは、不仕合せの底にある。もはや、私には人に恐縮しなければならぬやうな生得の特権が、何も無い。かへつて、マイナスだけである。

注九 『現代文学』昭和十六年十月。引用は山内祥史編『太宰治著作別同

時代評」(『國文學』昭和四十九年二月)による。

注十 「太宰治著『新ハムレット』」、「都新聞」日曜夕刊、昭和十六年八月十八日発行。

注十一 「空想と現実」、「日本評論」昭和十六年九月一日発行。

注十二 「太宰治について」新ハムレット及び東京八景、「文学界」昭和十六年九月。引用は山内祥史編「太宰治著作別同時代評」(『國文學』昭和四十九年二月)による。

注十三 「新ハムレット」論、『一冊の講座 太宰治』有精堂、昭和五十八年三月二十日発行。

注十四 「初めてたづねた頃のこと」、「太宰治全集第四卷月報4」筑摩書房、昭和三十一年一月二十日発行。引用は山内祥史「解題」(『太宰治全集』第四卷)による。

注十五 『新潮』昭和二十三年三月〜七月。

注十六 『恋と革命 評伝・太宰治』講談社現代新書、昭和四十八年八月三十一日発行。

(本学大学院博士課程)